

千葉医学会

徳久 剛史

千葉医学会 最近35年間（1974年～2009年）の歩み

千葉医学会は、千葉大学医学部を中心に広く医学・医療の進歩に寄与することを目的として、千葉医学専門学校が千葉医科大学に昇格した大正12年（1923年）に設立されました。主な活動としては「千葉医学雑誌」の刊行のほかに、学術大会や千葉医学会例会の開催などを行なっています。最近では、医学研究や医療技術における高度化や専門化がますます加速される中であって、「人類の健康と福祉に貢献するために次世代を担う有能な医療人・研究者を育成し、疾病の克服と生命現象の解明に向け未知の領域に挑戦し続ける」という千葉大学医学部と大学院医学研究院のミッションの遂行に向けて、その活動範囲を広げています。ここでは創立86年に及ぶ千葉医学会の歩みのなかから「千葉大学医学部百周年記念誌」に記載された内容以降の最近35年間の歩みをまとめます。

千葉医学雑誌

千葉医学雑誌は、年間6回6号のペースで発行を続けており、平成21年8月の時点で85巻4号まで刊行しています。最近35年間での特記すべき内容としては、平成元年10月に「特集号：バイオエシックス」を発刊しました。バイオエシックス（生命倫理学）の中でも医学医療の対象となるトピックスを医学部教員に執筆していただき、それらへの対処の仕方や意見等を千葉大学の教員で倫理・哲学・法律・経済の専門家に執筆していただきました。大変充実した内容で、読み応えのある特集となりました。

また、平成7年（71巻1号）からは、和文・英文の目次および要旨をインターネットの千葉医学雑誌のホームページ（<http://www.c-med.org/>）において公開しています。さらに平成18年からは、千葉大学附属図書館の協力を得て千葉医学雑誌を電子化し、千葉大学学術成果リポジトリ「CURATOR」（<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/index.html>）において全文を無料で閲覧できるようにしました。近年中には千葉医学雑誌の第1巻から全て電子化してインターネットでの公開を予定しています。

千葉医学会学術大会

千葉医学会学術大会は、会員に医学・医療に関する最新学術情報を伝えるために毎年1回のペースで、千葉県医師会学術大会との連合大会として開催してきました。しかし、平成12年に千葉県医師会が独自の学術大会を創設したため、平成14年の第77回からは千葉医学会の単独開催となっています。昭和63年の第64回までは、学術大会の形式も特別講演、シンポジウム、話題など各回で異なっていましたが、平成元年の第65回からはシンポジウム形式やシンポジウムと特別講演を組み合わせた形式で行なわれるようになりました。さらに千葉医学会の単独開催となった平成14年の第77回からは、千葉医学会に所属する教室のOBでグローバルに高い評価を受けた医療や研究をされた先生方の業績をご本人にご講演いただき、さらにそれが現在どのように受け継がれ、展開されたかを後輩の先生にご紹介いただく形式で開催されています。ご講演される先生には、診療、研究に没頭されていた若き日の体験を語っていただくことで、現役の医学生にも強い感動と示唆を与えていただいています。第52回以降の各回の学術講演の演者とタイトルを次頁以下に記載致します。

千葉医学会例会

千葉医学会所属の各教室主催で医学・医療に関する学術研究会が、千葉医学会の例会として年間で17～20件程度開催されています。各例会では、その年度内に行なわれた最新の研究成果の発表と討議などが行なわれています。そして、平成21年3月末現在では第1188回の開催数になっています。

会員数の推移

正会員数は、昭和50年3月末で735名でしたが、その後順調に増加し平成3年には2000名を、平成15年には3000名を突破しました。しかし、ここ数年はやや減少傾向にあり、平成21年3月現在で2873名となっています。名誉会員64名と賛助会員8病院が加わると、総会員数は2945名となります。

千葉医学会賞と千葉医学会奨励賞の創設

千葉医学会会員と医学部や大学院学生の研究活動の活性化ばかりでなく、彼らのキャリア・アップと研究マインドの育成を目的として、平成20年度から千葉医学会賞と千葉医学会奨励賞を創設しました。千葉医学会賞は、基礎医学部門と臨床研究部門に分かれており、基礎医学部門では、先端医科学分野の進歩において顕著な貢献をした研究者に、また臨床研究部門では、最先端医療や医療水準の向上に顕著な貢献をした研究者に贈られます。また、千葉医学会奨励賞は、基礎医学や臨床研究の分野で顕著な研究成果を発表し、かつ将来の発展を期待し得る若手研究者に贈られます。

【平成20年度第1回受賞者】

千葉医学会賞：基礎医学部門 山下政克（免疫発生学）「Th2細胞分化と機能維持のエピゲネティクス」
臨床研究部門 南野徹（附属病院循環器科）「心血管系再生と老化のメカニズムの解明と先端医療開発」
千葉医学会奨励賞：古賀俊輔（医学部6年）「BHD遺伝子異常に起因する多発性肺嚢胞疾患の病理－反復性気胸に対する新たな洞察」
川口憲治（医学部6年）「キネシン分子モーターの1分子顕微解析による神経変性疾患メカニズムの解明」
澤井撰（神経内科学）「プロテオミクスを用いた神経免疫疾患活動性マーカーの網羅的解析」

千葉医学会学術大会における特別講演等の
演者と演題名

回数	開催年	演者	演題名
52	昭和50年	真島吉也, 小越章平	完全静脈栄養法
53	昭和51年	石田名香雄	肝炎ウイルスと肝炎
54	昭和52年	小張一峰	腸管感染症の病態からみた治療の問題点
55	昭和53年	吉川政巳	老年病学の進歩
56	昭和54年	平山恵造, 鈴木二郎	脳血管障害（パネルディスカッション）

57	昭和55年	稲垣義明, 大藤正雄, 高見沢裕吉 河野守正, 牧野博安	聴音波診断の実際（パネルディスカッション）
58	昭和57年	川崎富作, 斎藤俊弘, 増田善昭 宮内好正	大動脈疾患を巡って（パネルディスカッション）
59	昭和57年	清水喜八郎	抗生物質療法の現状と問題点
60	昭和58年	永井友二郎, 金子好宏	うつ病への対応とその間にあるもの
61	昭和60年	市川平三郎	画像診断の進歩とがん治療 奥井勝二 消化器癌治療の進歩
62	昭和61年	道場信孝	虚血性心疾患（IHD）の高次予防 の考え方とアプローチ 古田昭一 高年齢者（70歳以上）の虚血性心 疾患に対する積極的療法の現況に ついて
63	昭和62年	平田幸正	糖尿病へのアプローチ診断と予後 をめぐって
64	昭和63年	小出桂三	腎の生理と機能障害（各種治療法 を含む）
65	平成元年	笹月健彦	疾病の宿主要因
66	平成2年	島田馨	Compromised host 感染症
67	平成3年	郡司篤晃	医療計画の課題としてのプライマ リ・ケア
68	平成4年	大村裕	脳と肥満
69	平成5年	寺澤捷年	老人と漢方
70	平成6年	小幡裕	最近の肝炎の診断と治療をめぐって
71	平成7年	宮内好正	心臓弁膜症外科治療の現況
72	平成8年	江原正明, 竜崇正, 更科廣實 木村秀樹, 辻井博彦, 山崎修道	がん治療の最近の進歩（シンポジ

第3章 関連施設、団体の歩み

- | | | | |
|----|-------|--|---|
| | ウム) | | |
| 73 | 平成9年 | 福田健, 西牟田敏之, 寺田修久
田辺恵美子, 河野陽一
気道アレルギー, アトピー性皮膚
炎, 食物アレルギーの病態と治療
(シンポジウム) | 80 平成16年 磯野可一
千葉大学第二外科が歩んできた食
道外科の歴史と実績
島田英昭
21世紀COE拠点形成プログラムで
目指す食道癌診療の新しい展開 |
| 74 | 平成10年 | 菅野治重, 山岸文雄, 野田公俊
岡慎一
エマージング感染症の特徴と対策
(シンポジウム) | 81 平成17年 宮治誠
かびと共に40年——皮膚科医から
基礎研究者へ
亀井克彦
肺真菌症の原因菌とその病原性に
ついて |
| 75 | 平成11年 | 高橋和久, 北原宏, 下山直人
松井英雄
腰痛 (シンポジウム) | 82 平成18年 鍋谷欣市
恩師に学んだ東洋医学の手習い草
紙とその展開
寺澤捷年
漢方医学の普遍性を如何に担保す
るか? —— 異なったパラダイムの
和諧を求めて —— |
| 76 | 平成12年 | 金澤康德, 山田研一, 津山嘉彦
浅野武秀
糖尿病 最近の進歩 (シンポジウム) | |
| 77 | 平成14年 | 川崎富作
川崎病との出会いから世に認めら
れるまで
寺井勝
最新の病因研究 | 83 平成19年 大藤正雄
肝臓癌の臨床
—— 画像が開く先端医療 ——
横須賀収
変貌しつつある肝炎治療
—— 肝癌発症の抑止に向けて —— |
| 78 | 平成15年 | 市川平三郎
消化管二重造影法の開発から, 早
期胃癌診断実践の道のり
丸山雅一
診断学の進歩からみた消化器癌検
診システムの諸問題 | 84 平成20年 多田富雄
教えられたこと, 伝えたいこと
中山俊憲
免疫システム, その統御による免
疫治療の開発研究 |
| 79 | 平成15年 | 寺島東洋三
細胞周期と放射線
松本智裕
有糸分裂期のチェックポイント機構
とその変調がもたらす発ガン
宮本忠昭
重粒子線による早期肺癌治療
—— From radiotherapy to radiosur
gery —— | 85 平成21年 島崎淳
前立腺癌の内分泌療法
市川智彦
前立腺癌における臨床ならびに基
礎的研究と現状の課題
(とくひさ たけし) |